

中間時代

□「中間時代」の学び全体のアウトライン

第一部 神の歴史計画から見る中間時代

第一章 中間時代とは

第二章 神の歴史計画

第二部 反キリストの予表

第一章 反キリストの予表に関する預言

第二章 歴史的成就＝アンティオコス4世・エピファネス

第三章 宮きよめの祭り（ハヌカ）

第三部 宮きよめの祭りでのメシアの教え

第一章 イエスの神性宣言と光の奇跡との関係（ヨハネ10：22～39）

第二章 「光の中を歩む」（Iヨハネ1：5～9）

□はじめに

1. 中間時代とは

- (1) 旧約聖書の最後の預言者はマラキ。マラキから新約聖書の福音書でイエスが誕生するまでの時期を、中間時代と呼ぶ
- (2) マラキは、メディア・ペルシヤによって支配されていた時期の預言者。その後、覇権はメディア・ペルシヤからギリシヤへ、そしてローマ帝国へと移っていく激動の時代が、中間時代である。その間、約430年。イエスが誕生したときは、ローマ帝国の初代皇帝アウグストのときであった（ルカ2：1）

2. 中間時代の前の預言者たち

- (1) ダニエル・・・神の歴史計画を預言した。特に、エルサレムを支配する世界的覇権国家が4つ登場すること
 - ① バビロニヤ、メディア・ペルシヤ、ギリシヤ、そして第四の国
 - ② 第四の国・・・歴史的には、まずローマ帝国として登場し、いくつかの段階を経て現代社会に至る。そして、将来、反キリストによる世界統一政府となる
- (2) 3人の預言者【ハガイとゼカリヤ、マラキ】の預言
 - ① メシアが来ること
 - ② 主の日が来ること、そして神の国が到来すること
- (3) よって、中間時代の信仰者たちは、メシアを待ち望んだ。そしてメシアが来ることと「主の日」が来ことは、セットであった。

3. 主の日とは・・・神のさばきが地上の諸国諸民族に下り、諸国の王座が覆る時期
 - (1) この時期を経て、イスラエル王国は地上に再興され、メシアが王となる
 - ① メシアの支配はイスラエルだけにととまらず、全世界に及ぶ
 - ② メシアは、神による平和と正義によって世界を支配する
 - ③ これが、神の国である
 - (2) メシアの初臨と「主の日」の間に、教会時代が入ることは、旧約聖書ではまだ啓示されていなかった。
 - ① このことは、新約聖書で明らかにされた
 - ② 旧約聖書で啓示されず新約聖書で明らかにされたことを、新約聖書では「奥義」という。新約聖書には全部で10の奥義がある。→ 奥義について次のテーマとして取り上げる予定
4. 主の日と反キリストの関係
 - (1) 主の日の期間は、7年間
 - (2) その後半の3年半の時期は、イスラエル民族にとって「かつてなかったほどの苦難の時」(ダニ 12:1)
 - (3) この後半期に、イスラエル民族に激しい攻撃をかける人物が、反キリスト
 - (4) 反キリストの呼称
 - ① 反キリストについては、旧約聖書の中でいろいろな呼び方がされている。創世記では「おまえの子孫」(創 3:15)、イザヤ書では「バビロンの王」(イザヤ 14:4~11)、エゼキエル書では「悪に汚れたイスラエルの君主」(エゼ 21:25)、ダニエル書では「小さな角」、「来るべき君主」
 - ② 新約聖書では、「不法の人、滅びの子」(Ⅱテサ 2:3~12)、「反キリスト」(Ⅰヨハ 2:18)、「白馬の騎士」(黙 6:2)、「獣」(黙 11:7、13:3~18、16:10~16、17:7~18、19:17~20)
5. 中間時代における反キリストの予表
 - (1) 中間時代においては、この反キリストの予表となる人物が現れた。→ 中間時代においてそのような人物が現れたことで、将来、主の日において登場する反キリストを、明確に認識することができる
 - (2) 第二部は、中間時代に登場した「反キリストの予表となる人物」について。その人物は、メディア・ペルシヤの次にエルサレムを支配した国、ギリシヤの王のひとり。その人物の登場までの歴史を概略記すと次の通り
 - ① 紀元前 332 年 ギリシヤ・マケドニアの王アレキサンドロスが、エルサレムに平和的に入城 (ゼカ 9:1~8)
 - ② 紀元前 323 年、アレキサンドロスがバビロンで死去。享年 32 歳。その後、ギリシヤ帝国は、四つに分裂。四つの国の中で、最初にイスラエル地域を支配したのは、南のエジプト (プトレマイオス王朝)
 - ③ 紀元前 198 年に北のシリヤ (セレウコス王朝) が、エジプトを破って、イスラエル地域の支配者となった

- ④ このシリヤから、ひとりの王が、反キリストの予表として登場した。彼の名は、アンティオコス4世・エピファネス（在位 175-164 B.C.）
6. 反キリストの予表について預言したのは、ダニエル。ダニエル書での預言箇所は次の表。ダニエル書には反キリスト本人に関する預言もあるので、参考のため、反キリストに関する箇所も表に記載する

ダニエル書の章	反キリストの予表	反キリスト本人
7章		8、11、20～26節「小さな角」
8章	9～14節「小さな角」	23～25節「横柄で狡猾な王」
9章		26節「来るべき君主」、27節
11章	21～35節「卑劣な者」	36～45節「王」
12章		1、7、11節 イスラエルにとって「苦難の時」、その日数

- (1) アンティオコス4世が反キリストの予表となる中心ポイントは、エルサレムの神殿に自分の偶像を置くこと。イエスご自身が、このことを教えた（マタ24:15）。
- (2) 前回2月の福岡集会では、8章9～14節の「小さな角」の預言を扱った。
- (3) 本日は、11章21～35節「卑劣な者」について。この預言の箇所を見ながら、アンティオコス4世の時に起きた歴史的事実も合わせて解説し、「第二章 歴史的成就=アンティオコス4世・エピファネス」の学びとする

第二部 反キリストの予表

第二章 歴史的成就=アンティオコス4世・エピファネス

□ダニエル書第11章の構成 大きくは3つの区分

1. 2～20節 先代の王たちに関する預言 =アンティオコス4世の舞台設定
 - (1) 2節 ペルシヤの王 第四の者=アハシュエロス ギリシヤへ侵攻 BC480
 - (2) 3節 ギリシヤの王 アレキサンドロス
 - (3) 4節 アレキサンドロス 32歳で急死 BC323 →帝国は4つに分裂
 - (4) 5～18節 北の王（シリヤ）と南の王（エジプト）との争い
 - (5) 19節 北の王 アンティオコス3世・・・「大王」、BC223～187
 - (6) 20節 北の王 セレウコス4世フィロパトル BC187～175
2. 21～35節 反キリストの予表であるアンティオコス4世に関する預言
 - (1) 21～24節 アンティオコス4世の台頭
 - (2) 25～28節 第1次エジプト戦役
 - (3) 29～30節 a 第3次エジプト戦役
 - (4) 30b～35節 ユダヤ人への迫害

3. 36～45節 反キリスト本人に関する預言

(1) 36～39節 反キリストの性格や所業

- (2) 40～45節 【大患難期が3年半経過した時点で世界主要国家10に対して反キリストが挑戦。参照 ダニ7:20】 特にその一つ、南の王（エジプト地域）に攻め込む。しかし、東の王（イラク・イラン地域）と北の王（シリア地域）とが反キリストに敵対する。反キリストは、エジプトから北上して地中海とエルサレムの間に本営を置く。東と北の連合軍との戦いで反キリストは死ぬ【→しかし、その後、反キリストはよみがえって3人の王を倒す。そして大患難期の後半、世界を支配する。参照 ダニ7:20、黙13:3、11:7】

□反キリストの予表であるアンティオコス4世に関する預言

1. アンティオコス4世の台頭（ダニエル11:21～24） BC175

(1) 21節 王位を横領する

① 21節 a 「卑劣な者」

- 王位継承における不法を示す・・・正統な王位継承者は、前王の子デメトリウス。アンティオコス4世は前王の弟。
- 性格の卑劣さを示す

② 21節 b 「彼には国の尊厳が与えられない」 彼は正統な王位継承者ではない

- ③ 21節 b 「彼は不意にやって来て」 = 「彼は安全なときにやってきて」・・・前王は殺された。その事件のとき、その子デメトリウスはローマで人質になっていた。アンティオコス4世・エピファネスはアテネにいた。事件が落ち着き、安全になってから、アンティオコス4世はアテネからシリアの首都アンテオケにやってきて、まだ若い王位継承者デメトリウスの後見人という振りをした。

(2) 22節 権力を固める

① 「巧言を使って国を堅く握る」・・・陰謀策略を用いて王位をものにした

- 王位を奪うために必要なものは、経済力と軍事力。他の兄弟や他国の王と組んで、金銭的支援と軍事的支援を受けた。
- 正統な王位継承者であるデメトリウスを暗殺した。
- 暗殺の実行者も口封じのために闇に葬った。

② 「洪水のような軍勢も彼によって一掃され、打ち砕かれた」

- アンティオコス4世が王座を奪ったことに対して、これを阻止しようとかんがりの規模の軍隊が動いた。
- しかし、彼はこれを打ち破り、王権を確立した。

③ 「契約の君主もまた、打ち砕かれる」

- 「契約の君主」とは、モーセ契約（律法）におけるリーダー、すなわちユダヤ人の大祭司

- アンティオコス 4 世が大祭司を打ち破った＝律法による正統な大祭司であるオニアスを罷免し、彼は大祭司を自分の意に沿う者に替えた。大祭司は 第一にレビ族アロンの家系から、第二に終身職、第三に例外的に交替する場合は、身に欠陥を負ったときのみ（レビ 21 : 16～24）とする律法は、無視された

(3) 23 節 勢力を伸ばす

① 「彼は同盟してはこれを欺き」

- エジプト王のプトレマイオス 6 世は甥。紀元前 170 年にエジプトと同盟条約を結ぶ。
- 「欺き」とは、表向きはエジプトと友邦関係を結んだように見せかけ、実際のところは、エジプトへの影響力を強めるという策略の一環。

② 「ますます小国の間で勢力を得る」

- アンティオコス 4 世が活動できたのは、比較的小規模な民の間のみであった。
- 大局的にはローマの勢力が伸びてきて、シリアの領土は縮小傾向であった。

(4) 24 節 富を奪い、それをを用いて影響力を保つ

① 「彼は不意に州の肥沃な地域に侵入し」

- 「不意に」＝安全な時に・・・アンティオコス 4 世の戦い方は、相手方を警戒させず、安全に生活していると思わせておいて、防衛態勢が緩んだところで、攻撃を仕掛けるというもの。
- 「肥沃な地域」とは農産物が豊かな地域を指す。アンティオコス 4 世の攻撃対象は、豊かな地域。警告なしに攻め込んで、収穫物を奪った。

② 「彼の父たちも、父の父たちもしなかったことを行う。彼はそのかすめ奪った物、分捕り物、財宝を、彼らの間で分け合う。」

- 先代の王たちも他国を侵略した。
- 何が違うか・・・先代の王たちは、戦いで得た富をシリア王家の贅沢な生活のために使った。それとは違い、アンティオコス 4 世はどうしたか。
- アンティオコス 4 世は略奪した富を「彼らの間で分け合う」、すなわち協力者たちに分配して彼らからのサポートをつなぎとめるために使った。

③ 「彼はたくらみを設けて要塞を攻めるが、それは時が来るまでのことである」

- アンティオコス 4 世はエジプトをはじめとする他国への陰謀を続けた。
- しかし、アンティオコス 4 世が陰謀を巡らし、他国を侵略する期間は、神が許す時までである。神はアンティオコス 4 世に治世 12 年を与えた。

2. 第 1 次エジプト戦役（ダニエル 11 : 25～28）

(1) 25 節 北のシリアが南のエジプトを攻撃する。エジプトも応戦するが、味方の中から裏切りが起きて総崩れとなる。

(2) 26 節 裏切りは「南の王のごちそうを食べる者たち」、すなわちエジプト王の側近、

から出る。

- (3) 27節 アンティオコス 4 世の当初の目標はエジプト征服であった。エジプトの王と「一つ食卓につき、まやかしを言うが、成功しない」、すなわち両者は和睦交渉の席に着いて、シリヤがエジプトを併合しようとするが、合意には至らない。
- (4) 28節 アンティオコス 4 世は、エジプト征服はできなかったが、多くの財宝を携えて自分の国へ帰る。その途中で、事件が起きる。「彼の心は聖なる契約を敵視して、ほしいままにふるまい、自分の国に帰る」
- ① 「聖なる契約を敵視する」とは、モーセの律法に基づくイスラエルの神政体制、すなわち大祭司を頂点とする祭司制度を敵視するということ
- ② この第 1 次エジプト戦役において、ユダヤ人たちは、シリヤに対して反乱を起こした。エジプト軍が勝ってアンティオコス 4 世は殺されたというデマが広まったためであった。
- ③ しかし、アンティオコス 4 世は死んでいなかった。彼はエジプトからシリヤに帰国する途上で、ユダヤを經由し、反乱を制圧した。この制圧のための軍事行動はわずか 3 日間であったが、その間にユダヤ人の 4 万人が殺され、4 万人が奴隷となった。まさに「ほしいままにふるまう」であった。

3. 第 3 次エジプト戦役 (ダニエル 11 : 29~30a)

- (1) ダニエル書の記述では 2 回目の戦役であるが、歴史的には第 3 次となる。
- (2) 29節 「定めの時」、すなわち、神が定めた時である。アンティオコス 4 世は再びエジプトを攻撃する。今度こそ征服するという意図をもって。そして実際にも少しのところで達成できたはずであった。
- (3) 30節 a 「キティムの船が彼に立ち向かって来る」・・・ローマの軍船が介入してきた。上陸したローマ軍はアレキサンドリヤ付近でシリヤ軍と衝突。シリヤ軍は手痛い敗北を喫した。ローマ軍は、アンティオコス 4 世に対してエジプトからの撤退を要求。アンティオコス 4 世はこれ以上ローマとの戦いを続けるリスクをおかすよりも、エジプトからの即時撤退を選んだ。かくしてエジプトはローマ帝国の支配下となった。

4. ユダヤ人への迫害 (ダニエル 11 : 30b~35)

- (1) 30b~31節 エジプトを征服できなかったうっ憤をユダヤ人に向ける
- ① アンティオコス 4 世は落胆する。彼はエジプト征服という長年の夢をローマによって断たれた。彼はいきりたち、その腹いせをユダヤ人に向けた。このときには、ユダヤ人たちは別段シリヤに対して反乱を起こしたわけではない。彼らには何のともがめもなかったにもかかわらず、である。
- ② 彼は引き返す。イスラエルの地は、エジプトとシリヤとの間に位置する。アンティオコス 4 世は帰国にあたり、イスラエルを經由するルートを選んだ。
- ③ 彼は聖なる契約にいきり立つ。聖なる契約とは、イスラエルの祭司制である。それはモーセの契約に基づく制度である。アンティオコス 4 世は、祭司を中心として独特の生活様式を固守するユダヤ人に対して怒りを抱いた。

- ④ 彼はほしいままにふるまう。ユダヤ人に対する彼の迫害プログラムを実行することを指す。
- ⑤ 彼は帰って行く。アンティオコス4世は第一次エジプト戦役のときと同じく、イスラエル経由で自国に帰るので、イスラエルに再び来ることになる。
- ⑥ 彼は聖なる契約を捨てた者たちを重く取り立てるようになる。この者たちは、モーセの契約を捨てたユダヤ人たちで、ユダヤ人もギリシヤ文化にならおうという立場（ヘレニスト派）であった。このとき大祭司はすでにアンティオコス4世によって不正な人物メネラウスに交替させられていた。
- ⑦ 彼の軍隊は立ち上がる→（直訳）その勢力が彼の側に立つ・・・その勢力とは、「聖なる契約を捨てた者たち」、すなわちユダヤ人の中のヘレニスト派である。彼らは彼＝アンティオコス4世の側に立つ。⑥にあったように、アンティオコス4世も彼らを重く用いて、彼らを援助した。
- ⑧ 彼らは聖所を汚す。安息日に、ユダヤ人の背教者たちは、祭壇に豚をささげた。かくして、聖所（神殿）は汚された。
- ⑨ とりでをも汚す。シリヤ軍はエルサレムの町を略奪したうえで火を放ち、家々と城壁を破壊した。その後、ダビデの町（エルサレムの南側の向かいの丘）に幾つもの堅固な塔を備えた強固な城壁を巡らし、自分たちの要塞とした。シリヤ軍と共に、ユダヤ人の背教者たちもそこに駐留した。
- ⑩ 常供のささげ物を取り除く。ユダヤ人の背教者たちは、アンティオコス4世の命令に従い、毎日朝夕捧げられる火のささげ物を取り除いた。本来、モーセの律法で命令されていたささげ物であった。それを強制的に停止させた。
- ⑪ 荒らす忌むべきものを据える。「忌むべきもの」とは、偶像を指す。アンティオコス4世はゼウス像を設置した。マカバイ記第一 1:54には「祭壇の上に建てた」とある。神殿域の中、神殿の玄関入口と祭壇の間に設置したものと推定される。祭壇で犠牲をささげると、ゼウス像にささげることになる。また、神殿玄関前に大きな像が立つなら、遠くからもはっきりと見える。もともと目立つ位置である。BC168 キスレウの月25日
- ゼウスはギリシヤの主神。豚の犠牲がささげられた。
 - 安息日を守ることは禁止された。
 - ギリシヤ兵（シリヤ軍）たちは、遊女たちを神殿域に入れて性的行為を伴う儀式を行った。
 - かくして、エルサレムの神殿と神殿域は汚れ、さびれ、荒廃させられた。
- 「荒らすもの」とは、この状態をもたらすものという意味である。

(2) 32～34節 ユダヤ人による反乱

- ① 彼は契約を犯すものたちを、巧言をもって墮落させる。アンティオコス4世は、ヘレニスト派のユダヤ人たちを意図的に厚遇し、昇進させ、擁護した。それによって他のユダヤ人たちと対抗させた。
- ② しかし、自分の神を知る人たちは、堅く立って事を行う→（直訳）自分の神

を知る人たちがいる、彼らは強い、そして偉業を成し遂げる。

- この人々は、祭司マタティアと 5 人の息子たちを中心とした抵抗組織である。武装蜂起から 1 年で父マタティアは戦死。次の指揮官の地位を引き継いだのがユダであった。彼は別名をマカベアまたはマカバイ（鉄槌）。この抵抗運動を、マカベアまたはマカバイの反乱という。
- 彼らは主に堅く立ち、実際に強かった。アンティオコス 4 世が彼らに差し向けた軍勢を何度も打ち破った。
- 紀元前 165 年にエルサレムを奪回。キスレウの月の 25 日に、偶像や豚のいけにえによって汚されていた神殿をきよめた。これを記念して行うようになった祭りが、宮きよめの祭り（ハヌカの祭り）である。

③ 民の中の思慮深い人たちは、多くの人を悟らせる。彼らは、長い間、剣にかかり、火に焼かれ、とりことなり、かすめ奪われて倒れる。これは、ユダヤ人たちの中の正しい人たち（義人たち）についての預言。

- ユダヤ民族の中の賢い人たち 彼らは多くの人を教え導いた。アンティオコス 4 世は聖書を教えることも持つことも禁じる命令を発したが、義人たちはそれにもひるまず、主の道を教えることをやめなかった。
- 彼らは倒れた 王の命令に背いたために、多くの人々が死んだ。その死に方については、預言が示したとおり、剣にかかり、火に焼かれ、とりことなり、かすめ奪われた。

④ 彼らが倒れるとき、彼らへの助けは少ない。

- ここで言う「彼ら」は、民の中の義人たちである。彼らが倒れるとき、彼らへの助けは少ない。
- 「助け」とは、マカバイたちの抵抗組織である。確かにマカバイたちは強く、シリヤからイスラエルの地を解放したが、父マタティアに続いて、三男ユダ・マカバイも戦死、次の指揮官となった五男ヨナタンは善戦むなしくシリヤによって謀殺された。「助け」は少なかったのである。

⑤ 多くの人々は、巧言を使って思慮深い人につく。

- マカバイたちは義人たちにとって小さな助けであった。一方で、この時期、マカバイたちがシリヤ軍に対して勝利していくのを見て、それまでヘレニスト派を支持していたユダヤ人たちの多くが、うまいことを言ってマカバイたちの仲間であるかのようにして義人たちに近づいた。
- この人たちの勢力が、後日、次男シモンの子から発するハスモン王朝の政治姿勢に大きな影響を与え、ヘレニストへと転向させてしまった。

(3) 35 節 迫害における神の目的、そして迫害の期間は神の定めによる

- ① 迫害における神の目的は、信者を「練り、清め、白くする」ためである。金属を溶解製錬して不純物を除く、小麦をふるいにかける、洗う・磨く
- ② 「終わりの時まで」アンティオコス 4 世の治世の終わりの時=BC164